

《所沢税務署管内納税貯蓄組合連合会 会長賞》

税を通して伝える感謝

東町中学校 三年 山田 鈴子

私は中学一年のとき、事故にあった。

買い物からの帰り道、私は自転車に乗っていた。横断歩道を渡ろうとしたとき、視界にトラックが飛びこんできた。そこからは全てがスローモーションに見えた。あのとき見た景色を、私が忘れることはないだろう。

そして十分ほど経った頃に二人組の警察官がきた。

「大丈夫？怪我はない？」

優しい声と笑顔で声をかけてもらった。幸いにも怪我はなく、自転車の前輪がつぶれただけだった。それでも声をかけてもらった途端に、手の震えが止まらなくなり、一気に状況を理解した。自分が無事なことへの安堵よりも「死んでいたかもしれない」という恐怖の方が大きかった。

住所や電話番号、名前を伝えて両親に連絡してもったあとパトカーに乗せてもらい、両親が迎えにくるまで色々な話をした。学校生活や部活の話、趣味や将来の夢の話、今思えば私が事故のことを思い出さないように、ひたすら話しかけてくれていたのだろう。そのおかげですっかり落ち着き、両親が到着した頃には自

分の口からしっかりと説明ができるようになっていた。本当に感謝している。もちろんあの事故が良い思い出になったわけではないし、あの恐怖を忘れることはないとと思う。それでもパニックに陥りそうだった私を助けてくれた二人の警察官のことを、私は決して忘れない。

彼ら警察官の給料は税金から出ている。直接会って渡しているわけではないが、私が払った税金が彼らのために使われると思うと、少しずつ恩返しをしているような気分になれる。「あのときはありがとう、嬉しかったよ。」と伝えるすべはないけれど、税金を通して彼らへの誠意を示すことはできる。税金は無駄なものなんかではない。税金は私たちの生命・身体・財産を必死に守ってくれる、彼らのためのものでもあるのだ。